

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 30 日現在

機関番号：30107
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：17K13462
研究課題名(和文) 平仮名字体データベースと19世紀教科書平仮名字体コーパスの連携による平仮名史研究

研究課題名(英文) Historical Studies of Hiragana upon Integration of the Hiragana Grapheme Database and the 19th-Century Textbook Corpus of Hiragana Grapheme

研究代表者
岡田 一祐 (OKADA, Kazuhiro)
北海学園大学・人文学部・講師

研究者番号：80761220
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、そもそも19世紀における平仮名の変動とその末の仮名字体統一を正確に把握することを目指し、代表者がすでに作成していた仮名字体データベースおよび教科書字体コーパスの質的・量的向上を目的として行われた。本研究の成果は、おもに、資料や仮名字体理論の再検討にある。主要な成果のひとつとして、明治初期に活動した「かなのくわい」の活動を、従来漠然と把握されてきた同団体の活動の再検討により、平仮名史のなかにはっきりと位置づけられたことにある。この成果は、データベースやコーパスを漫然と拡充することを避けるうえでも重要なものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1900年に小学校で教育される平仮名が統一されてのち、平仮名の字体は安定して用いられているが、それ以前は安定性に欠いていたというのが大方の理解であり、安定にむかって自然な漸進していったのが明治初期の歴史であったかのように言われる。本研究では、それが非なることを、研究代表者によってすでに明らかにされていた小学校初等教科書における仮名字体教育順序の編成にくわえて、「かなのくわい」資料の検討によってさらに明らかにし、言語政策として統一されたことを明確にした点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：To elaborate the understanding of the history of hiragana in the 19th century, this study aimed at expand, both in quality and quantity, the hiragana grapheme database and the grapheme corpus of the 19th century readers that the principal investigator had developed. The major results of this study are to reexamine the well-known materials and grapheme theories. Of those results, we made clear the importance of The Kana Club (Kana-no-kwai), who advocated the kana-only writing in the early Meiji period, in the resulting 1900 kana standardisation. This result has also importance in avoiding aimless expansion of our databases.

研究分野：日本語学

キーワード：変体仮名 明治期読本 平仮名字体意識 活字 文字教育

1. 研究開始当初の背景

9世紀に誕生して以来ながらくのあいだ、平仮名には多種多様な字体があった。それは1900(明治33)年に小学校令施行規則が公布されるにおよんで画一化され、現代の姿を見せるようになった。このとき抛棄された仮名を変体仮名という。従来、明治期は変体仮名が整理され、現行の仮名字体に画一化される時代として理解されてきた。しかしながら、岡田一祐(2014)「平仮名字体意識と明治期読本」(北海道大学大学院文学研究科博士学位論文)は、現行の仮名字体とは異なる仮名字体に収斂する傾向があったなか、明治中葉に突如、いろは手本に限られて用いられていた仮名(いろは仮名という)を中心に画一化が進んだことを示した。しかも、現代の仮名は、いろは仮名そのものではなく、当時併用されていた仮名字体に交替したのもわずかにある。その理由は明らかでなく、現代の仮名字体の形成には不明な点が残されている。すなわち、従来変体仮名が整理された時代といわれる明治期においても、仮名字体の変遷は注意深い観察を要するのである。

平仮名の歴史を的確に描き出すには、平仮名の字源の漢字(字母)によってではなく、略された実際の形(字体)によって検討する必要がある。従来、平仮名は、字母によって検討されることが多かった。しかしながら、玉村禎郎(1994)「『春色梅児誉美』における仮名の用字法」(『国語文字史の研究二』和泉書院)によって同じ字母でも略し方の違う複数の字体間での使い分けがあることがあきらかになり、また、同一人物の書いたものでも、資料によって同字母でも使用される字体は異なるため、字母レベルでは、その差異を十分に捉えることができないことが明らかになった。この点で、字体のくわしい検討が必要になる。

2. 研究の目的

教科書はそのような画一化の進む中心のひとつであり、その観察の基盤を形成することに、19世紀教科書平仮名字体コーパス(以下本コーパス)の意義は存する。平仮名字体コーパスは、平仮名史研究の発展のためにも必要である。平仮名史の研究は、従来、個々の研究者が文献の精査を行うことによって行われてきた(とくに近年のものを挙げれば、斎藤達哉(2016)「足利本仮名書き法華経の異体仮名: 八の異体仮名の書記傾向」『専修人文論集』98など)。この方法の限界としては、(1)研究者が個々に資料にあたって字体を数えるために認定の違いが不明確で主観的になること、(2)ひとりひとりに調査できる範囲に限度があり通史的観点を得にくいこと、(3)データが共有されていないために発表された内容の確認が困難であることなどが挙げられる。そのため、共有のコーパスを構築することにより、これらの問題を打開することが期待される。

字体コーパスを開発するにあたって、字体の判定の基準となる異体字字書を得ることは、判断の共有のためにも必要不可欠である。申請者は「『和翰名苑』平仮名字体データベース」(以下本仮名字体データベース)を開発しており(Okada, Kazuhiro (2016). Reorganising a Japanese calligraphy dictionary into a grapheme database: The case of the *Wakan Meien* grapheme database. Paper presented at *JADH2016*, University of Tokyo), これを字書としてつねに参照しながらコーパス構築を図ることで、確実な発展が期待される。

3. 研究の方法

本研究では、字体コーパスと字体データベースの連携により、江戸期から明治期にかけての教科書における使用字体の量的な変動の把握を行い、収斂と画一化の様相を明らかにしようとする。本コーパスは、19世紀(江戸～明治時代)の教科書、とくに言語教材を中心的対象とし、各資料ごとに、平仮名の用例画像・本文(現代的表記)・字体記述・書誌情報等、附随する情報を持つ。字体数は変体仮名が出現しているか否かで把握されることが多かったが、頻度の多寡を考慮に入れられないという問題があった。明治期における字体数の収斂のなかで頻度がどれほど寄与したものは重要な問題であるが、本コーパスによってはじめて説得的にこの問題に取り組むことが可能となる。

また、字体記述の客観性に関する問題の解決も図る。岡田一祐(印刷中)「或る江戸期の仮名階層観『和翰名苑』における字体排列」(『国語文字史の研究十七』和泉書院)では、本仮名字体データベースの基盤となる『和翰名苑』の字体区分の妥当性が示されている。そこで本コーパスでは、本仮名字体データベースにしたがって字体を記述することで、能率を高めるとともに、客観的に妥当な字体記述を可能にすることを旨とする。

4. 研究成果

(概要)

本研究は、そもそも19世紀における平仮名の変動とその末の仮名字体統一を正確に把握することを目指し、代表者がすでに作成していた仮名字体データベースおよび教科書字体コーパスの質的・量的向上を目的として行われた。本研究の成果は、おもに、資料や仮名字体理論の再検討にある。主要な成果のひとつとして、明治初期に活動した「かなのくわい」の活動を、従来漠然と把握されてきた同団体の活動の再検討により、平仮名史のなかにはっきりと位置づけら

れたことにある。この成果は、データベースやコーパスを漫然と拡充することを避けるうえでも重要なものである。

(2017年度の成果)

初年度は、仮名データベースの基盤的整備を目指して、既存データの整理と拡大を行った。前期においては、東書文庫や国立教育政策研究所附属図書館にて国定前国語教科書の調査を行い、現在利用できるすべての教科書における異体仮名の表について調査・収集した。そのなかで、既存の仮名データベースの増補および修正などを行うことができた。異体仮名表については、統計分析等を行い、従来、不用意に異体仮名表に頼って国定前国語教科書における平仮名字体の推移がたどられていたところを修正することができた。この成果については、ポルトガルで開催された日本学に関する国際会議で報告した。

また、後期は、所属の変更があったため、研究に専念する時間があまり割けなかったものの、国文学研究資料館と人文学オープンデータ共同研究センター(情報・システム研究機構)で提供している日本古典籍字形データセットを活用して江戸期の資料について字体の精査を行った。これは、江戸期の平仮名史に関する記述として意味があるのはもちろん、今後、平仮名字体コーパスを江戸期に拡張するに際して、また、さまざまなデータをコーパス上で統一的に処理するための基盤に関する準備をすることができた。この成果に関しては、国内のシンポジウムにおいて報告した。

このほか、既存の仮名データベースの改修作業を上智大学で開催された日本学とデータベースに関する国際シンポジウムにあわせて行い、そこで進捗を報告した。

(2018年度の成果)

2018年度においては、仮名字体データベースを質的・量的に拡充するための取材を行った。前半期は、かなのくわい関係の資料を収集・調査し、仮名字体に関する情報を得た。かなのくわいでは、仮名字体の制限の提唱をした面々が属するいっぽう、そもそも複数の主義を持つものが集まっており、とくに仮名字体に関する主張をめぐる事実関係の確認を中心的に行った。この調査のなかで発見された資料を紹介することができた。

また、フランス国立印刷局の仮名活字を調査し、レオン・ド・ロニーの関係が示唆される仮名活字に関する調査を行い、19世紀フランス日本学における仮名字体の収集を行った。レオン・ド・ロニーは19世紀においてフランス日本学者としてはじめて正教授に就任した人物であるが、開国前後に日本学が発達した国々において、いかなる仮名字体が必要と判断されたか精査し、日本における傾向と比較することは、海外の日本学の精度を示すものともなり、本研究からさらなる発展を期待できる。

このほか、昨年度報告した日本古典籍字形データセットに関する成果を論文集の一編として寄稿したほか(編集中)、本研究における成果を背景として、イギリスで開催された国際学会で発表をし、江戸時代における仮名字体の複線的なありかたについての記述ならびに考察を報告した。また、エンゲルベルト・ケンペルの著作における仮名字体の扱いの移り変わりについての論考を著した。ケンペルの収集した資料は、本研究としても得るところがおおく、その基礎的な考察である。

(2019年度の成果)

研究代表者の主たる業務の多忙のために研究が遅延している。そのため、成果発表が十分にできなかったが、来年度は時間の調整のめどがつき、状況の改善が見込まれる。次年度に遅れを挽回するため、事業期間の延長を申請し承認された。

(2020年度の成果)

本研究においては、研究代表者がそれまでに作成してきた仮名字体データベースおよびコーパスの拡充と連携を図るべく、種々の資料の蒐集と検討とに多くが費やされた。この成果をふまえて、あらためて仮名字体データベースおよびコーパスの拡充を実施し、もって近世から明治期にかけての平仮名字体史研究の質的・量的な改善を図り、また、さらには国際的な文字コードであるUnicodeにおける変体仮名の改善などにも繋げたい。本研究において、検討された資料としては、明治期の国語教科書(読本)における異体字の掲出状況、国文学研究資料館と人文学オープンデータ共同研究センター(情報・システム研究機構)で提供している日本古典籍字形データセットの字体使用、かなのくわいにおける仮名字体改革の実態、19世紀欧米日本学、具体的にはレオン・ド・ロニーの製作させた変体仮名をふくむ日本語活字における平仮名字体認識の実相などである。これらの成果は、仮名字体データベースの改善に直接繋がるもの、あるいは、仮名字体データベースとコーパスとの具体的な連携にむけて、考慮すべきものである。延長年度の本年は、新型コロナウイルス感染症による影響の拡大にともない、調査や学会等での成果公表などに支障が生じたため、紙媒体において、これまでの成果の集約と公開とを行うことに意を注いだ。その結果、以下に報告する単行書1点、論文集寄稿1点、雑誌論文1点の成果を得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡田一祐	4. 巻 45
2. 論文標題 (影印) いしこみつてる(石河光熙) 『いつらのこゑのかむがへ』: ある音義派の仮名専用運動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 239-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiro Okada	4. 巻 14
2. 論文標題 Remarks on Kaempfer 's Imatto Canna	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of the Graduate School of Letters	6. 最初と最後の頁 15-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/jgs1.14.15	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田一祐	4. 巻 17
2. 論文標題 明治前期鑄造活字の平仮名書体における濁音表示と仮名字体意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報新人文	6. 最初と最後の頁 11-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kazuhiro Okada
2. 発表標題 Diverse standards in the Pre-modern Japanese orthography
3. 学会等名 The Twelfth International Workshop of the Association of Written Language and Literacy (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiro Okada
2. 発表標題 Hentaigana charts in Meiji Textbooks Revisited: An analysis of hentaigana charts
3. 学会等名 EAJS2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡田一祐
2. 発表標題 いろは仮名といまの平仮名: 近代における仮名の体系化
3. 学会等名 変体仮名のこれまでとこれから (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazuhiro Okada
2. 発表標題 Japanese philology: The Database of Premodern Japanese Works and the "Wakan meien" Hiragana Grapheme Database
3. 学会等名 International Symposium "Digital Humanities and Databases" (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuhiro Okada
2. 発表標題 The less unit-ness of grapheme in the Japanese writing system
3. 学会等名 EAJS2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岡田 一祐	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 368
3. 書名 近代平仮名体系の成立	

1. 著者名 加藤重広、岡墻裕剛（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 日本語文字論の挑戦（「変体仮名を学ぶ小学生」執筆担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------